

現代日本の社会と教育

— 人間形成の荒廃と病理 —

平 沢 信 康*

Society and Education in Modern Japan

— Moral and physical degeneration in children and adolescents —

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

Education in modern Japan has succeeded in raising the percentage of school attendance. In the present, Japanese pupils are achieving distinction in international comparative tests. Modern education has helped Japanese economy to develop, because it has produced a diligent and competent work force.

However, recently pathological issues have been involved in Japanese education. Since the middle of the 1970s, many problems have occurred in schools in Japan. Violence against teachers and parents is wide-spread in schools and homes respectively. Bullying, persecution, school-phobia, senior high school drop-outs, rigorous school regulations and so on, are all common phenomena.

The aim of this paper is to describe the pathology of education today in Japan from a sociological point of view.

The first chapter deals with the excess of education, and associated deviation. The second chapter discusses social changes in postwar Japan, especially within the family, the community, etc. The third chapter describes recent changes in the atmosphere in schools. The last chapter deals with both mental and physical disorders among Japanese children and adolescents.

KEY WORDS : 現代日本社会, 教育荒廃, 社会病理

概 要

本稿は、近現代日本の教育がもたらした「成功」に目配りしながらも、今日の教育の歪みや病理性といったマイナス面をとりあげて論じたものである。わが国社会に広く浸透した「教育」の過剰と、

それゆえの逸脱行動の噴出（家庭内暴力・校内暴力・不登校・いじめ・高校中退など）、そうした逸脱と病理の社会的背景、近年の学校という組織のもつ体質の変化について論じ、最後に、青少年のこころと身体の異変について論じた。

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

1 「教育」の過剰と逸脱行動

わが国においては、20世紀に入って初等教育の就学率が90%を超えた。さらにその後、今世紀もあと四半世紀を残すのみとなった頃から、高校進学率までもが90%以上となった。高校全入運動も手伝って、後期中等教育すらも我国においては準「義務」教育化した観がある。

1872(明治5)年に発布された「学制」の前文「学事奨励二関スル被仰出書」には、「自今以後一般の人民 華士族農工商及び婦女子 必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」との有名な一節がある。120年前に謳われた、この明治政府の宣言のめざすところは、今日、十二分に達成された。日本は、いわば、子どもの学校への「囲い込み」に超スピードで成功した社会であるといえる。

しかし、「他事を抛ち自ら奮って必ず学に従事せしむべき様心得べき事」と、設立されて間もない文部省(1871年創設)が奨励した、まさにその精神が、激しい競争原理を伴いつつ全国民階層に浸透し切った1970年代以降、わが国の教育は明治政府の文教担当者が予想もしなかったような荒唐と病理を内包するようになってきている。

国民はこの間、大いに「業を昌に」(同じく「被仰出書」)してきた。その結果、日本は経済大国となり、貿易黒字は年間1000億ドルを超えた。多くの識者、特に外国の分析者たちが指摘するように、学校教育で創られた勤勉で協調性に富み、数字に強い均質的に有能な労働力が日本の経済発展に寄与したことはまちがいない。そのことはわが国学校教育の肯定的な一面であり、「追いつき型教育」の成功といってさしつかえないであろう。

しかし、最近では日本型資本主義の「成功」と爛熟に伴走したかたちで病理が進行し、思春期前後の子どもの中に「問題行動」と呼ばれる逸脱現象が大量に発生してきている。家庭内暴力を初め、1970年代後半から1980年代前半にかけて全国各地で噴出した校内暴力(その約7割が中学に集中。生徒間暴力、対教師暴力、器物損壊の順に多

い)、いじめや迫害的行動、さらに殺人・自殺などがそれである。また、青少年非行が戦後第3のピークに突入したのが1977年からである。いわば、「負」の静かなる地殻変動がわが国の教育と人間形成の世界で、ひそやかに、しかしながら深刻なかたちで進行していると言わざるをえない。

「生涯教育」が提唱され、さらに「生涯学習」が叫ばれ、各地でさまざまなイベントが企画、実施されている。それらの用語が、成人教育や社会教育という言葉にとってかわるなかで、社会の「学校化」が進行しているといっても過言でない。

このように、現代日本の社会は、いわば「教育」過剰な社会になってきている。しかし、そうした動きと逆行するかのように、近年、飽和状態化した学校から「漏れ出し」とでも言える現象が顕著となっている。すなわち、登校拒否・不登校現象・学校恐怖症をはじめ、高校中退、入室・入級拒否、教室からの抜け出しと校内徘徊、保健室登校、心理的欠席などがそれである。

小・中学校の不登校児の数は年々増え続けており、年間50日以上欠席した児童生徒は、90年度が約4万8千人、91年度は約5万3千人(年間30日以上欠席者は約6万7千人)である¹⁾。その予備軍とみなし得る保健室登校の生徒も無視しえない数に上っている。

高校中退者は1980年代後半、11万人台を推移していたが、90年度は12万3千人に達した。中退理由のうち、就職や別の高校への入学など「進路変更」による中退が年々増え、中退者の4割を占めている。このうち就職希望が3分の2を占め、他の高校入学、専修・各種学校入学、大学入学資格検定受検とつづく。全生徒に占める割合＝中退率は2.2%であり、年間1校あたり22人が中退している計算になる²⁾。彼らの中には「不本意入学」が少なくない。偏差値という数量による一元的評価に基づく形式的な「輪切り」による進路指導のあり方が今日、問われている。

逸脱行動を示す子どものなかには、一過性のものとしてそこから抜け出していくものもあるが、こじらせていくものもある。彼らを待っているものは不安定就労(パートタイマー・転職・無業)

である場合が多く、なかには暴力団に加入するものもある。思春期以降の混迷の中で、宗教熱にとりつかれ、信仰によって自己を強固に枠づけていく若者も多く、いわゆる新宗教ブーム、さらに新・新宗教ブームを担う層として取り組まれてきている。オカルト、超能力、超常現象、占い、UFOなどが広く若者の関心をとらえており、この種の雑誌が多く刊行されていることも見逃せない現象である。

今日の教育をめぐるさまざまな問題は、単に「教育（界の）問題」ということを超えて、社会問題化しており、さらに言えば、先進国病・文明的様相を呈するに至っている。

2 逸脱と病理の社会的背景

以上のような現象が現れてきた背景を、教育の基盤をなす社会（家族からマクロな社会まで）の変貌から考察したい。

戦後、日本の家族形態は、家父長制大家族からマイホーム型の核家族へ変化した。そして、一般に、農民家族から労働者家族へ、3世代家族から2世代家族への傾向を強めた。子どもの数も減少した。少産少子化が進み、一生涯のうち1人の女性が産む子どもの数の平均を示す合計特殊出生率は年々減少し、1991年は1.53人にまで低下した。経済的負担、住宅環境、育児環境、晩婚化、離婚率の上昇などがその原因と考えられる。今日、わが国の家族は、1世帯の平均家族数が2.91人という小規模な家族形態となった。

所得倍増計画を背景とする経済審議会答申のマンパワー・ポリシー（1963年）以降の能力主義的教育政策は、出産をきびしく自己管理し少なく生んで立派に育てたいとする親の願望と相呼応するなかで、日本の家族を急速に「教育家族」・「業績家族」化した。

国民は、戦前の天皇制支配から解き放され、「忠良ナル臣民」から「主権在民」と変わった。また、都市の発達により農村共同体の紐帯の呪縛からも離れていった。こうして市民社会が成熟するにつれて、「公」的なるものは次第に人々の価値規範の中から剥落していった。1872年の「被仰

出書」は、国民に就学を促し動機づける論理として「学問は身を立つるの財本」と説いていたが、それから1世紀後、この功利主義的な立身の精神がわが国の教育を覆い尽くした観がある。明治10年代後半から、とくに教育勅語体制の成立（1890年）以降、第2次大戦の敗北までの国家主義が支配的な時代が終わると、そのくびきを打ち破るように、教育の世界でも、次第にself-interestが露骨なかたちで成長していった。

都市化と過疎化によって、地域共同体が崩壊し、日本社会が大衆社会化するなかで、地域の教育力は低下していった。現代日本の資本主義は、公共の論理や人々の連帯性の紐帯をますます蚕食し、個々の「私」への閉塞を促進することと平行して繁栄してきた。飽食の時代にもかかわらず、「衣食足って礼節を知らず」と嘆かれる、相変わらず、否、以前にもまして公德心の薄い社会となっている。孤立的人間関係のなかでの排他的競争原理が教育の世界にも貫徹し、教育の「私事化」が進行した。

経済成長の成功は、同時に、効率と合理化を追求する、複雑でストレスフルな社会の到来でもあった。経済大国化は、物質的な消費と能率という価値の拡大と、経済効率と無限の消費を押し進め、そのことがまた、経済成長と技術革新の原動力となった。

わが国労働者の勤勉さと会社への忠誠心は、高い生産性と強い国際競争力を生み、海外市場での成功と外国企業の没落・衰退、海外の不動産や企業の買収、膨大な貿易黒字をもたらした。しかし、その一方では、過労死に象徴される長時間労働による慢性的疲労と、遅い帰宅や単身赴任による家庭における父親不在を強いた。「会社人間」化した父親の家族における不在は、今や常識となった。そのことは子供のあいだの規範意識の衰退、躰の欠落と無関係であるまい。

戦後、男たちは会社という村型組織のなかにどっぷりとつかってしまい、個人として自身を確立することを自己規制しつつ滅私奉公、もてるエネルギーを忠誠競争のなかで会社に捧げた。夫を企業に奪われた家庭のなかで、母と子は依存しあって

きた。いわゆる「母子癒着」である。「母原病」なる言葉や「カプセル親子」という語さえ生まれた。こうして、成人しても母親の庇護から抜け出せない男子の「マザコン」化傾向に拍車がかかった。

子育て支援のネットワークが地域社会のなかで衰えたために、母親のあいだに、子育て不安・育児についての混乱が近年広がっている。コンクリートの密室の壁の中で、朝から晩まで子供と向き合うことを余儀なくされ、孤独感や育児不安におそわれる専業主婦が少なくない。そうした若い母親のあいだに、社会からの孤立に対するものが自己実現できないフラストレーションから児童虐待にいたるケースが増えている。そのなかには優等生タイプの母親も少なくない。「母性」の未成熟・未形成も一因である。深刻な児童虐待が起こる背景には、父親が忙しく家庭を顧みられず、あるいは逃避していて、母親を精神的に支えることが出来ない事情が背後にあるともいわれる。

社会が豊かになるにつれ、生活の商品化が進み、妻・母は、金をつかって家庭内の仕事を外に任せ、時間を稼ぐ。それは、家事労働の外注化、外部機関への家庭機能の社会化、公共部門化などと称される。これは既婚女性の社会進出の要因となったが、育児の外注化は、80年代の初頭におこったベビーホテル事件のような悲劇も生んだ。教育を外注化する一方、その教育費や生活費をまかなうために母親が働きに出る共稼ぎ・共働きの家族が増加した。学習塾、スポーツ・スクール、音楽教室、予備校などの教育産業が提供する商品・サービスの購入のほかに、スポーツ少年団の活動に要する出費など、教育費負担は増した。

労働政策的観点からみると、「企業国家」の要請に応じて、家族は、労働力の再生産と世代的再生産につとめるということになるが、少子化に伴い、子供の進学問題がますます深刻化するなかで、教育投資は増えている。保護者にとって重くなっている教育費の負担は、一方で、塾や予備校、テスト業者などの「受験産業」の繁栄をもたらしている。高校生の「学歴信仰」は今日なお強まっているデータもある³⁾。

「学力」をはじめ、音楽やスポーツの才能においても、子供たちの間に競争がくりひろげられて、能力主義の深まりのなかで、学校よりも学校的な家族が出現するようになった。妻・母はハウス・キーパー、ホーム・チューターとなり、過干渉型の教育ママが登場した。彼らは、子どもを過保護にする一方で過剰な統制を加え、小さいときからさまざまな習いごと、スポーツ、学習を強いる。家庭内暴力の遠因がここに胚胎しうる。そこにはあるべき本来の豊かな愛情や甘えが欠落している。

日本は、一億総中流化といわれるように、平準化され同調性のある社会であるが、その一方で、ブランド商品への志向の高まりに一端がうかがえるように、他者との差異化をも人々が強く志向する社会でもある。その教育版が、学歴競争と化している面がある。階級上昇や階層脱落の防止のためばかりでなく、入学動機において大学名すらもブランド商品化した意識がある。

1950年代から1970年の前半にかけて、高校進学率は40、50%台から90%へ、大学進学率は10%から30%台後半へ急上昇した。その間、高度成長期であることも手伝って、教育機会は拡大していったが、1970年台半ば以降、進学率の頭打ちのなかで「閉じられた競争」の様相を呈するようになった。国民の全階層を捉えきった競争原理は、上述のような教育の過熱を生み、過度の受験競争と偏差値偏重をもたらした。

3 学校の変貌

学校の人材選抜機能と学歴偏重の風潮・意識は、強まりはしても弱まるきざしを見せない。今や、「真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底」(教育基本法)する姿勢はかすみがちで、学校は、教育基本法が謳う「人格の完成」という理念・理想に沿った人間形成の場というよりも、差別選別機関化している。序列主義が強まるなかで、親たちのあいだにもまた、学校を進学・就職のために手段視する意識が広がっている。

今日では、中学校だけでなく、小学校教育までもが、さらに大都市圏では幼稚園教育までもが、選別・選抜の過程となっている。就学前教育までも英才教育への志向を強めている。しかも、受験のための「学習」は露骨な営利主義を基盤とする塾や予備校に先行されさえしている。偏差値をめぐる情報処理については、学校よりも大手予備校などの方がはるかに近代的で電算化されている。1992年11月下旬に埼玉県を発端に問題となった「業者テスト」は、その偏差値情報が中学校から私立高校側に提供され、推薦入試というかたちで「青田買い」をもたらしていた。

公教育は、教育サービスの「自由化」の波に押され気味である。東京などにおける公立中学校ばなれなどはその好例である。高等教育でも、今後の18歳人口の激減を控え、よりすぐれた学生を獲得しようとサバイバル・ゲームの傾向を増し、国立大学でさえも、かつての権威に寄って安穏としておられない時代となった。

子どもの学校への囲い込みは、1970年代の半ば頃から、それ以前にまして強化されてきた。

マスメディアの発達によって、日々、洪水のような情報が注がれ、非教育的情報の過多、退廃文化、自然環境の破壊など子どもの豊かな成長を阻む状況に囲まれて、学校は「教育的」空間を創っている。その外に広がる社会においては、ますます情報や消費行動・選好の自由化・個性化・多様化が進行しているのに対して、学校では、特に中学校教育にあっては、そうした傾向に対して抑止的である。一見、価値の多元化と個性化が進んだように見える社会のなかであって、そのこととあたかも逆進的に校則が以前にもまして厳格煩瑣なものとなり、管理主義が画一的に強化されてきている。

今日、校内暴力の最盛期にもまして親を中心とする社会の学校への期待が肥大化し、学校の管理主義的、能力主義的教育体制も一層整備され、さらに子供の学校への過剰適応が強制されるなかで、教師が悪しきパターンリズムの発揮に傾きやすい条件が増幅された。学校は、秩序から逸脱・脱落していく子どもに対してきびしい管理的統制を加

えている。その痛ましい例が、1990年7月におきた兵庫県神戸市高塚高校での女子高生の校門圧死事件である。校則にしたがい、遅刻監視の教師が勢いよくしめた正門の鉄門扉に挟まれての悲劇であった。校則と生徒指導、学校における規律について、するどく問われる事件であった。

ゆとりのないのは生徒ばかりでない。教師は、授業、その準備、会議、研修、テストづくりと採点、その他の雑務で多忙であり、疲労が蓄積している。心のゆとりが失われがちで、言葉は粗暴になり、あるいは体罰に走り、人権感覚が麻痺してしまう教師も少なくない。そのため、教師による子供の人権無視に対して弁護士団体が関心を寄せ発言する時代になった。深刻な体罰事件を起こす教師、日常的に暴言・暴力を子どもに浴びせるなど登校拒否の原因をつくる教師など、いわゆる「問題教師」の存在も無視し得ない。今日では、女性教師にも怒鳴り声や体育会調の男言葉が日常化していることが稀でない。

このような悪循環は、豊かな人間性を育む、信頼と許容性に富んだ学級づくりや明るい校風の醸成を阻害している。

しかし教師ばかりを責める訳にはいかない。家庭において必要なしつけ・基本的な生活習慣が教えられないままに学齢を迎える子どもが増え、本来家庭でなさるべき「しつけ」までも学校が抱え込まざるを得ない状態になっている。生活指導にあって、まともに躰られておらず、常識からも疎外されて育ってきている子供への対応は教師に過労を生んでいる。

教授・学習の前に、少なからぬ教師が取り組まなければならない、かつ相当なエネルギーを費やさざるを得ないのは、学校生活の安定と学校秩序の維持や回復である。生活指導でふりまわされ、過労に陥り、登校拒否になる教師、あるいは辞めていく教師も少なくない。国民各階層に広がった規範意識の低下は、確実に子供のあいだの利己主義を助長している。また、少産少子化の結果、甘えが目立ち、自己本位であり、自制心がない青少年が増えている。

授業の成立も困難になってきている。教師の権

威の喪失は、とりわけ中等教育において、授業の不成立として、すなわち教師-生徒関係の「くずれ」として現れている。従来の一斉教授法に則った授業という形式において一人の統率者である教師へ多数者の視線（意識）を集めるという関係の構造が、かなり明白に崩れてきている。今日、全国的に広がっている大学の講義や成人式における「私語」の深刻さは、この延長線上にある問題である。

今日の普通科底辺校といわれる高校現場に現れている教育困難は、とくに深刻であり、制度としての学校の慣行として定着してきたはずの「教え-教えられる」という教師と生徒の関係形式そのものが、すでに成立しにくくなってきている。学校秩序の拒否またはそれからの逸脱が甚だしい「底辺校」では、授業そのものの不成立が目立ってきている。生徒も教師も、学び、教える意味・意欲をみいだし、見失わないでいることが困難でさえある。

日本人の人並意識は、1960-70年代に、高校進学率の上昇をもたらした。戦前の階級格差の甚だしい社会から、戦後は平等が尊重される社会へ変貌したが、その平等主義は、悪平等に陥る危険性を常に内包している。体験や実務をとり入れる可能性など、今日改めて後期中等教育のあり方が問われている。

ほとんどの子どもが高校入学する、事実上の高校全入制下の今日、進学の意欲の有無はもはや問われない。その結果、少なからぬ高校で、雨が降れば遅刻が増え、雪の日は登校者が少なく一時限目カット、と生徒の放縦が目立っていく。二、三時限目に登校する者もいれば、午後登校の生徒もいる。校門立ち番の教師は、朝の職員打ち合わせも授業の準備も捨てて、校門に立つ。それでも遅刻は後を絶たぬ。前夜の夜ふかし・遊びすぎが原因で月曜日がとくに多い。昼休みにも、当番教師は昼食もとらず校門に立つ。勝手に外出して、スーパーなどへ買い食いに出かける生徒がいるからである。

授業のチャイムが鳴ると、教師は教員室を飛び出し、廊下でブラブラしている生徒を教室に入れ

ようとする。騒ぐ生徒を静かにさせ出席をとるが、私語をやめない、寝てしまう、漫画本を読む、ガムをかむ、などはいくら注意しても直らない者が少数ながら存在する。中学時代に勉強が不得意で、内容未消化のままに進学してきている生徒たちが高校の授業についていけない、理解できないこともこの背景にある。毎日、毎時間、同じことを説得しなければならぬ状況は教師をして「動物の調教師」と自嘲させ嘆かせている。

休み時間に火災報知機を鳴らす、防火シャッターを下ろす、ワルの生徒を職員室へ呼んで注意すれば、帰りにその教師の車は傷つけられる。バイクの事故、万引き、暴力事件などで、いつ警察や学校から電話がかかってくるか教師は気が休まらない。こうした状況も現代の高校教育の現場実態の一つである⁹⁾。

さらに加えれば、「起立」と号令をかけても生徒が立たない、休み時間と授業との区別がつかない、学習への興味の欠如とシラケなどが職業高校等で一般化している。以上のごとき状況は、全国的に、一部の荒れた中学校にもみられる。学校は多くの学習意欲のない子どもをも囲いこむことに成功しているが、稀には「殺人以外の事件は何でもある」ほど、無法地帯化した空間となっている。

自立心と知恵が育たず、状況判断が出来ぬ青少年も増えているといわれる。企業の人事担当者を困惑させている、いわゆる新人類にみられる「指示待ち人間」である。

そのような子供を抱え込むなかで、自由主義社会にありながら、否、そうであるが故にか、学校教育は、管理主義的硬直性を脱し得ないでいる。

学校空間は、同時に、過度に同調的な体質をもってきている。異質さを嫌い、自己の異質性を抑制し、異質なものを排除しようとする力学が働いている。この集団的同調主義の体質は、組織内の協調性・同質性を尊重する、わが国の社会に伝統的に継受されてきた「和」の原理と関係する。その否定的側面が、今日の学校社会の病理性の一因となっている。さらに、「1億総中流化」といわれるごとく、国民の大多数が中流意識をもつ社会であることの反映でもある。個の未確立、民主主義・

自由主義の未成熟が、マイノリティー排除の社会的土壌としてある。

よそものを嫌い、別の価値観を嫌う、創造性を外へ出すのを控えていないと具合が悪い、といった状況が、学校、さらには日本全体に存在する。

小中学校においては、平等原理の一方で、現実の生活における激しい競争原理・「能力主義」がヒドゥン・カリキュラムとして厳然として併存している。この相対立する原理の相克が、とくに前者がタテマエ化する一方で後者が優勢になることが、中学生におけるいじめ発生の大きな背景となっている。

思春期のいじめは、同調競争の裏返しとして、ピアグループからはずれているものに対して限度をこえた迫害的いじめを展開していく。そのいじめは、いぜんとして学校化過剰であるもの、支配としての文化基準からズレているもの、均質化・画一化する自分たちの集団からみて平均的でないものに集中していく⁹⁾。障害児、虚弱児、帰国子女、残留孤児の子ども、優等生、動作が緩慢な子や愚鈍な子などがその対象となる。

1991年11月15日、大阪で、体の弱い中3の女子生徒が校内で蹴られて死亡、男女4人の生徒が逮捕された事件は記憶に新しい。障害児が健常児と一緒に学ぶ「交流教育」を20年間続けた先進地として知られる豊中市で起きただけに、波紋は大きかった。いじめは1年以上も前から続いていて、しかも事件の1、2カ月前から、母親が娘の恐怖と不登校を教師に訴えており、市立第15中学校の責任は重い。被害者は、1、2年のときは養護学級に籍を置きながら普通学級の授業に出席し、3年になって、障害も軽く、家族の希望もあって普通学級に移っていた。

いじめ件数は、文部省によると、80年代後半に急減し、90年度には85年度の6分の1の約2万4千件（小・中・高）となったというが、潜伏したケースが多く、実数はより多いものと推測される。しかし生徒間暴力は、80年代前半減少したが、半ば以降再び漸増傾向にあり、90年度は過去最高だった82年度の約3千件に迫った。いじめが、より迫害的・暴力的様相を呈してきたことの現れである。

希薄化する子どもたちの人間関係のなかで、いじめがあっても、見て見ぬふりをする傍観者がほとんどである。子どもたちのあいだで正義の観念が薄弱になっている。孤立やいじめを恐れて、表面的な同調性の中に身をひそめ、自己抑制する空気が支配的になっている。現代は子どもにとって、本音でのつきあい、ふれあいが困難な時代となっている。

学校で本当の自分を出せない。家の中にいる自分と外での自分が違う。家の中にいるときは本当に自然で明るい。家族なので本音で会話でき、つまらない意地もはれる。学校では、人の機嫌ばかりとって楽しくなくても笑ったりしている、人の目が気になってしょうがない。人と話しているときにも、まわりの子からどう思われているかとか、こんなこと言ったら絶対きずつくだろうとか、こうやってうけようとか計算してしまう。このような思春期心理をも生んでいる。

以上のごとく、いじめ問題については、社会集団がもっている異質性や逸脱性の排出・排除のメカニズムが影を落とし、日本社会が抱えている独自の集団圧力が相俟って、事態をいっそう陰湿なものにしている。

重篤な不登校に陥っている子供も、そうでない子供たちも、また、欠席日数が長期であれ、短期であれ、あるいは遅刻や早退であっても、彼らが等しく感じている学校へ行くのがいやだという学校への回避感情が広がっている。この感情は、欠席や遅刻・早退に至らず一見何の問題もなく毎日登校している子どもたちの多くにも共通してみられる感情である。⁹⁾

不登校にはさまざまなケースがある。怠学もあれば、神経症が原因のものもある。教師の暴言など精神的ストレスをうけ、教師にたいする不信・恐怖からのものもある。なかには、優等生の不登校児もいる。人一倍感受性が強く心の優しい場合が多い。それまでの学校への過剰適応を疑問視しはじめ、「優等生」であることのアイデンティティについての混乱・葛藤から自意識過剰のようなかたちで不登校に陥る子どもでもある。

開校以来、受験戦争・偏差値教育・輪切り教育

からはみ出した生徒を受け入れている北海道の北星学園余市高等学校は、中退者の転編入に力を入れてきている。受け入れられた子どもの歴史はさまざまだが、前の学校では「教師が、男も女も、やたらと暴力をふるう」「幼稚園から入ったが、高校になって、成績が悪いと置いてもらえなかった」「部活に入ったが、レベルが高くて、相手にされなかった」「ぜんそくが治らない。休みが増え、それで学校をやめざるを得なかった」「精神的な圧力で、身体に変調をきたした」など、怠けや非行でなく、居場所を失った理由が語られている⁷⁾。

潜在的な学校不適応者の数は急増しているが、現代の子どもたちに、対抗文化を創るゆとりは少ない。70年前後の高校紛争のような政治的エネルギーもない。せいぜい目立ちたい衝動から、ツッパリや暴走行為に走る程度である。

学校教育は競争原理におおわれ、学校間格差を生み、過度の記憶の強制、序列主義、周到にして執拗な管理主義によって、差別選別がなされ、子供たちを孤独な葛藤に追い込んでいる。受験圧力のなかで、息詰まる子供たちには「居場所」は求めにくく、「棲み家」・「巢」探しへの欲求が強い。保健室へのかけ込みやフリースクールへ行くことで無理な我慢をやめ、安心した顔になる例もある。今や、保健室はメンタル・ヘルス・ケアの場として、重要な空間であり、「心の避難所」「学校のオアシス」として大切な機能をはたしている。

学校での学びは、偏差値中心の「受験学力」へ学力観が矮小化されるなかで、豊饒な学びとなりにくい。主知主義的「学習」に終始し、「こころの教育」・情操教育・道徳教育については、かけ声はあっても軽視され、実質が欠落しがちである。いわゆる「知識太り、徳（知恵）痩せ」の青少年をつくっている。今日、多くの学校は、個々の子どもたちが自分のもっている可能性に挑戦できる雰囲気醸し出しにくくなっている。人格的社会的自立や人間的な豊かさを育む教育が、家庭でも学校からも希薄になってきている。

4 青少年の心と身体の異変

国土政策・都市政策の貧困とも関係するが、都市化の進行とモータリゼーションにより、安全な遊び場の確保がますます困難となっている。子どもが安心して遊べる路地裏や原っぱが失われ、かつてのギャングエイジらしい遊び体験はめっきり減少した。遊び集団も、かつての異年齢集団から同学年の遊び仲間へと変化してきており、異年齢のなかでの遊び・役割体験といった経験が希薄になっている。それとともに、遊び文化の伝承が衰滅しつつある。また、習いごと・塾がよいで忙しく、遊ぶ暇がない。遊ばないので、経験の蓄積なく、遊ぶ方法・技術を知らない。そのため遊べないし、どうやってあそぶのか、わからない子どもたちが現われている。

外遊びの減少は、自然の豊かに残る地方でもその傾向をまぬかれない。戸内でファミコン・テレビゲームに興じ、漫画や雑誌を読み、音楽を聞くといった室内での静的遊びが支配的になってきている。そのため、対他関係における我慢強さや人間関係の知恵を含め、社会性が十分に発達しないばかりでなく、身体の健康な発達も阻害されている。

10代の若者の多くに、スポーツばなれと運動不足が広がっている。屋外での運動不足は、さまざまな変化をもたらしている。

戦後、日本の青少年の体位・体格は向上したが、文部省の1991年度の体力・運動能力調査によれば、子どもの体力は停滞気味である。子ども・青年の体力・運動能力の総合点は、10年前と比べ、10、13、16、18歳など、ほとんどの年齢層で劣っている。とくに落ち込みが激しいのが、身体の柔らかさを計る「立位体前屈」で、81年を100とすると、13歳男子が80、16歳女子が85.5など、各年齢とも5から20ポイントも低下した⁸⁾。

柔軟性の低下のみならず、骨折しやすい、骨のもろい子供が増えた。飛んできたボールを避けられない・払い防ごうと手が出ない、倒れてもとっさに手を出して自己を防御できない、そのため顔面を打つ、歯を折るなどの子どもも増えている。

動物として基本的な反射的自己防衛反応すら学習できていない世代が登場してきている。

体温にも変化が生じた。摂氏36度前半、さらには36度以下といった低体温の子供が増えた。そのために、疲れやすい、身体がけだるい、休み時間も外遊びせず、教室でぼんやりしているなど、全般にひよわな、野生味に乏しい身体になってきている。

小学生が塾帰りに薬局やスタンドで栄養ドリンク剤を飲む、子供が土日、家でゴロゴロしていたいと休息を求めるなど、受験体制のなかで子どもたちは過労に追い込まれている。「オヤジ・チルドレン」なる造語が生まれる所以である。乳幼児期からのテレビづけ、夜更かし型の生活スタイル、そこから朝起床しにくく、朝ごはんを抜く、さらに進んで睡眠覚醒リズム障害なども青少年の健康疎外の一因となっている。都市における人口過密と競争の激化のほか、残留農薬、食品添加物、河川・地下水・海洋・大気汚染なども表立たないが原因として無視し得まい。今日、青少年の健康問題は生物学的・生態学的な問題でもある。

食生活の洋風化、ファストフードの普及、街にあふれるスナック菓子や清涼飲料水、それに比例するように、アトピー性皮膚炎や小児成人病が増えるなど、若者の健康が悪化している徴候がある。高血圧・動脈硬化・高脂血症・糖尿病など、かつては成人の病気とされたものが子どもに現れている。飽食の時代を反映して肥満児も増え、さらに脊柱側湾症、胸部の変形、過保護による甘えが原因と推測される心因性の下肢痛、大気汚染による喘息、アレルギーなども注目される。

こころのもつれ・歪みが身体化して、心身症として現れる青少年も増えている。

胃・十二指腸潰瘍、過敏性腸症候群、神経性鬱状態、自立神経失調症、若い女性に広がっている摂食障害ないし食行動異常（いわゆる拒食症・過食症）などである⁹⁾。

教育内容が増加し、高度化・低年齢化するなかで、子どもの負担は増え、「落ちこぼし」が余儀なくされているとの反省をもとに、70年代に打ち出された「ゆとりの時間」にもかかわらず、子ど

もたちに、精神的余裕・ゆとりはますますなくなり、競争原理のなかで促迫され、常に焦らされ緊張している。近年、心理臨床の現場からは、子どもたちが強迫症的になっているとの報告もある。NHKの調査によると、中学生の4人に1人、高校生の3人に1人が肩こりを訴えており、少しのことにイライラしやすい¹⁰⁾。

こうして、動物の子どもが自然にそなえている可愛らしさや目の輝きは、近年、急速に日本の多くの子どもから失われてきている。かえって、発展途上国の子どもに、それらがみられる。

社会の情報化、自然環境の劣悪化のなかで、青少年のあいだで生命の尊厳感が失われ、迫害的傾向が近年、陰湿、かつ残忍なかたちで、増大している。80年代初めに起きた中学生による横浜の浮浪者襲撃事件をはじめ、あとを絶たない「いじめ」、その帰結としての自殺や女子高生コンクリート詰め殺人、心ない公共の建物・器物損壊、陰湿な「いたづら」などがそれである。多くの子どもが慢性的なストレス状態を示しており、目当てなき欲求不満、焦点なき攻撃衝動といった鬱屈した心理は、ときに、突発的な殺人事件、若者によるいわゆる「ムカツキ殺人」を発生させている。規範意識の未確立ということ以前に、自分の感情や衝動をコントロールできない子どもが増えているのが現実である。

現代の中学生像は、高度経済成長の前半期における暴力教室の主役であった中学生像とは違う。後者は、「貧困・低学力・差別・就職」といったキーワードで常識的に理解できる行動であった。これに対して、前者はいつも生活に充実感がもてず、自分自身にいらだっているという、いわば、生活全体から慢性的な欲求不満状態に陥っている感があり、暴力のある方も衝動的、盲目的、かつ遊戯的ですからあって、常識的には理解が困難なことも多い。またその内面は、うつ屈した複雑なメカニズムをもち、恐らくは乳幼児期から蓄積されてきた発達疎外の結果としての、全面的な人格発達の疎外状況を示している¹¹⁾。

家庭でアクティング・アウトして親に暴行するなど、思春期の情緒障害にも深刻なケースがある。

稀には、登校拒否と家庭内暴力を悲観して母子心中をはかる痛ましい事件もある¹²⁾。

また、青少年のあいだに閉塞感が広がっており、名状しがたい寂しさと孤独感から連続後追い自殺に至った例もある。

1970年代以降、学生相談や心理臨床の立ち場から青年のモトリアムや「スチューデント・アパシー」、「退却神経症」が問題提起されたが、今日的危機は、そうした不決断・猶予、無気力・無感動・無意欲・内閉と無為といった、心理的問題群・問題行動を含みながらも、さらに、より身体的・生理的不調 disorder として現れる層が増えたことにあるのではないか。明らかに、青少年の生命のより基層的なレベルへと病理が進行している。最近、青春期内科なる診療科が生まれたこともその証左の一つである。知育・徳育・体育の基本となる心身の健康の根幹が、大都市圏を中心に、脅かされつつあるのが現状である。しかも、原因が、単に学校や個々の家庭にあるばかりでなく、複合汚染的様相を呈していることに今日の教育、とりわけ生活指導上の困難があるのである。

<註>

- 1) 文部省学校基本調査
- 2) 朝日新聞 1992年1月15日 91年度は約1万人減ったが、中退率は2.1%と、あまり変わらない。朝日新聞 1992年12月12日
- 3) 高校教育研究会と福武書店教育研究所によるアンケート調査。「一流大学卒という値打ち」が「これから上がる」と答えたのは、80年では、12.6%だったのに対し、今回は21.9%と上昇。逆に「これからやや下がる」「ぐんと下がる」を合わせた割合は、80年の52.4%に対し、今回は37.6%にとどまった。朝日新聞 1992年11月18日
- 4) 二村輝雄「生徒の放縦に苦悩する高校一学習意欲失い説得追いつかぬ」朝日新聞 1990年7月31日 論壇
- 5) 竹内常一「現代社会における思春期統合」『現代社会における発達と教育(第四集)』日本教育学会 現代社会における発達と教育研究委員会 昭和61年8月 161頁
- 6) 森田洋司『「不登校」現象の社会学』学文社, 1991年, まえがき3頁
- 7) 岩本孝一 「高校中退者の道を閉ざすな」朝日新聞

1988年5月9日

- 8) 朝日新聞 1992年10月10日
- 9) 森 崇『思春期内科診断ノート』講談社現代新書862, 1987年, 31頁
- 10) NHK 1992年10月18日のニュース報道
- 11) 赤羽忠之「司法福祉論・家族関係論の立場から」日本教師教育学会編『教育者を育てる教育』(日本教師教育学会年報)1992年10月 31-32頁
- 12) 最近の例では、熊本の主婦(45)が中学三年の一人息子の胸を出刃包丁で刺し、縄跳び用の縄で首を絞めて殺し、自らも首・両手首を切り首をつって自殺をこころみ、無理心中をはかった事件がある。長男は3年の1学期から不登校、夏休み明けの9月初めの共通テストの結果が悪く、それを注意すると家庭内暴力がひどく、思いあまっの行動という。朝日新聞 1992年9月27日